

しなやか女性医学研究者支援みやこモデルを終えて

本学では平成22～24年度の3年間に文部科学省・科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成事業」として、「しなやか女性医学研究者支援みやこモデル」の活動に取り組みました。事業終了後の平成25年以降も引き続き学内の体制を維持して活動を継続しています。今回本学での女性医師・医学研究者支援の現状を紹介させていただきます。

我が国における女性研究者の割合は、欧米の先進諸国と比べ未だ低い状況にあります。このため女性研究者がその能力を最大限発揮できるための環境整備を目的に、平成18年度より「女性研究者支援モデル育成事業」が行われています。本学は平成22年度に本事業に応募、医科大学としては全国で2番目に採択されました。

平成22年の採択後に男女共同参画推進センターを設置、センター長、副センター長2名、専任の事務職員1名の体制で4つのワーキンググループ（広報・啓発WG、在宅支援WG、病児保育WG、就労形態検討WG）を設置しました。具体的には、病時保育室の設置、可逆的な短時間勤務形態の構築、在宅支援による研究継続可能な環境の整備を進め、並行して啓発活動

強化による意識改革・モチベーションの向上維持を図りました。

初年度に最も力を入れて取り組んだことは病児保育室の設置です。附属病院に来院する患者さんと交差しないで病児を預かることのできる場所を探すことから始めました。旧看護学舎、現在は学生課のある正門横の建物に白羽の矢をたて、内科の研究室に快く場所を譲っていただきました。平成23年7月、広く明るい病児保育室をオープンし、ベテラン保育士さんによる保育を開始することができました。平成24年度の登録研究者数は86人、延べ利用児数は529人のほり、年々利用者数が増えています。病児保育室を利用しない日でも、保育室の存在そのものが精神的な支えになるという声も多く、利用者からの評判も大変良好です。物理学の花井名誉教授に作成いただいた夜間にも予約できるWEBシステムなど、これまでの病児保育の課題を克服する工夫を行い、医学的にも質の高い病児保育を追及しています。昨年度からは5年の学生実習に病児保育室の見学を取り入れ、次世代の意識改革にも繋げています。

平成23年度には次の課題として就労支援に取



学内ニュース

り組みました。時間的な制約のある中で研究を進めるために、補助金による研究支援員（週8時間）の配置を行いました。他大学では支援員として派遣会社からの研究員を雇用していますが、本学では連携する近隣大学から研究支援員を雇用し、女性研究者の支援と同時に医学研究の発展のための人材育成をめざしました。具体的には、2年間でのべ21名の研究者（基礎系6名、臨床系15名）に、本学学生5名、京都府立大学9名、京都工芸繊維大学6名、京都大学1名の学部生あるいは大学院生を研究支援員として配置しました。アンケート調査によると、利用者である女性研究者からは「時間的制約による精神的、物理的困難が軽減、研究が飛躍的に進んだ」、雇用された支援員の側からは、「実験手法や解析方法を学ぶことができ、自分自身に役立った」という回答が目立ち、雇用する側とされる側の双方に win-win の関係を構築できたと考えております。

また、就労形態の柔軟化を目的に、週28時間勤務にて研究を継続できる職位としてフューチャー・ステップ研究員の職位を創設し、3名を採用し試行しました。いずれも、高いレベルの医学研究を継続し、論文発表や学会での最優秀賞を受賞するなど成果をあげることができました。補助金終了後も大学独自の予算で継続することができ、平成26年度からはフューチャー・ステップ研究員の応募を男性にも広げました。平成26年5月には人数を5名に増やしました。さらに附属病院では平成25年から特定専攻医の職位を新たに創設し、同年8月より実施しています。特定専攻医とは、所属する各教室と相談したうえで週20時間、24時間、28時間など柔軟性のある勤務形態で、附属病院に在籍できる職位です。フューチャー・ステップ研究員や特定専攻医という新たな身分により、学位取得後や専門医取得後の多様な選択肢ができ、研究の継続や医師としてのキャリアアップがしやすくなったと考えております。

最終年度の平成24年度には、医学科卒業生を

対象とした就業状況調査を行ないました。昭和54年度～平成20年度の30年間の卒業生のうち、学友会名簿で住所が明らかな2,465人（男性1,964人、女性501人）にアンケートを郵送し、622人（女性198人、男性424人）より回答をいただきました。ご協力いただいた方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

主たる業務の身分、雇用状況などを性別に比較したところ、卒後6、7年目ごろより男女による違いが出てきており、女性は男性より大学院進学率が低く、学位取得率も低い、子育てを理由に非常勤となることが多い等の状況が示されました。子育て期に多様な勤務環境を整備することがキャリアアップ支援になることが明らかとなり、本調査結果は上述の柔軟な勤務体制の構築の根拠となりました。また、医療機関（附属病院）は他機関に比べ勤務が長時間で雑用が多いことも示されました。今のような状況下では、医育機関での次世代の育成はもとより、質を保つことも困難であり、性別に関係なく医師および医学研究者支援の必要性が浮き彫りとなりました。調査報告書は学友会会員の皆様および各教室、関連病院に配布しましたが、若干の残りがありますのでご希望の方はご連絡願います。

このほか、これまでに学内外の演者による男女共同参画に関するセミナー、インタビューを行い、毎年トリアス祭で講演会も開催しました。詳細は講演集、ホームページでご覧いただけます。セミナー等のWEB配信も可能となっており、関心のある方はセンターにお問い合わせください。

医学科卒業学生の女性比率は近年、おおむね25%を超えており、大学院生に占める女性比率もほぼ同様です。しかし医学部教員に占める女性比率は9%前後と低いまです。女性がのびやかに医学研究に従事し、医師としてのキャリアアップを行える環境作りを目指して今後も活動を続ける予定です。学友会の皆様におかれましてはご支援のほどを何卒よろしくお願い申し上げます。

男女共同参画推進センター
センター長 矢部千尋

寄付のお願い

「女性研究者支援モデル育成事業」の補助金終了後に平成25年度からは大学独自の予算を得てフューチャー・ステップ研究員と病児保育を継続しております。しかしながら男女共同参画推進センターではより一層安定的な財源を確保し、今後も長期展望に立つ計画のもとで性別にかかわらず医師及び研究者支援を行っていきたいと考えています。この活動をご支援いただ

き、寄付にご協力いただけましたら幸いです。寄付の詳細につきましては、男女共同参画推進センターのホームページ (<http://www.kpu-m.ac.jp/j/miyakomodel/>) に掲載する予定です。何卒よろしくお願い申し上げます。

男女共同参画推進センター
センター長 矢部千尋